

平成18年7月22日(土)

NPO法人・越谷市郷土研究会主催

# 第357回 史跡めぐり

江東区

## 中川船番所資料館と荒川ロックゲート

案内者 加藤 幸一

越谷駅東口集合→準急中央林間行乗車(9:24)→住吉駅乗り換え  
→都営新宿線の東大島駅→中川船番所資料館の見学→塩なめ地蔵  
→荒川ロックゲートの見学と昼食→スーパー堤防と小松川閘門跡  
→東大島駅→越谷駅着(15:00頃解散予定)



江東区 中川船番所資料館 「展示解説書」の表紙より転載

# 中川番所とは

ここ「中川番所」は、「中川関所」ともよばれている。この時代は徳川の将軍様を頂点とした幕府が政治をおこなっているわけだが、その幕府が設置したのが、この中川番所だ。江戸の東の端にあたるこの土地で、小名木川を通過して江戸を出入りする船のとりしまりをしている。そもそも「番所」「関所」というものは、山の峠や川の渡しなどの交通の要所に設置されて、そこを通る人や物を取りまるところだ。他にもいろいろな場所に設置されているぞ。下総(今の千葉県)の関宿、相模(今の神奈川県)の浦賀、江戸に近いところでは小岩・市川関所とか、金町・松戸関所などなど…。

ほら、あの船は役人に手形を見せているだろう？  
ああいう手形を持っていないと、ここは通してもらえない。だから、手形をなくしたりしたら大変なんだ。

…ああ、役人が大きな声で手形を読みあげているなあ…なに、あの船頭は下総国の本行徳村(今の千葉県市川市)から来たそうだ。船に積んでいる品物は酒だな。どうやら厳しく調べられているようだぞ。

中川番所の真正面を流れている川は小名木川だ。  
この小名木川を横切って、番所の建物の横を流れている川が中川。中川をはさんで向こうがわの、小名木川とまっすぐつながっている川が船堀川。この川は新川ともよばれている。船堀川はずーっと向こうで江戸川につながっている。

小名木川は徳川家康様の時代に作られた川で、船堀川もそうだ。家康様は、天正18年(1590)に江戸城にお入りになると、江戸の町づくりをはじめられた。町と一緒に、道や溪(港)、川や水路を整備したり、新しくつくったりした。小名木川もその時につくられたのだ。

これらの川ができたことにより、江戸川や利根川から江戸のお城のすぐ近くまで物を運ぶ川の道ができた。品物をできるだけ多く、早く、安全に運ぶには、船で運ぶ方法が一番いいかな。もちろん、物だけでなく人も船を使う。この川は成田山や香取神宮へお参りにいく客もよく利用するのだ。

## 中川番所

深川番所から中川番所へ 中川番所は、河川交通路上の江戸の出入口に設けられた川船を査検するための関所である。正保四年（一六四七）に小名木川の隅田川口北側に深川番所が設置されたが、明暦大火後の本所・深川地域の市街地化に伴って、深川番所が江戸市中に入ってしまった。その機能を果たすことができなくなった。そこで寛文元年（一六六一）に番所を小名木川の中川口北側、小名木村地先へ移転し、これを中川番所と称した。

中川番 中川番役を勤めたのは寄合の旗本で、当初は五人、元禄二年（一六八九）に四人、宝永元年（一七〇四）に三人、幕末に至り慶応元年（一八六五）に四人となり、さらに同三年には寄合からの任命を廃し、交代寄合三名が任命された。中川番は若年寄支配で、躰躰之間詰であった。番役は五日交代で勤番したが、番役の旗本自身は平常中川番所に詰めず、家臣のみを派遣した。その構成は、

弘化年間（一八四四―四八）では番頭二、添士二、小頭二の六人であった。

### 査検対象と方法

中川番所の査検対象は利根川水系や房総方面と江戸との間を航行する川船で、女性の通行は禁じられ、武器・武具類の査検も厳重に行われた。当初商人物資の査検は対象外とされていたが、享保年間（一七一六―三六）以降、特定の物資については、江戸入出津量の把握を行うようになった。これを御規定荷物といい、江戸入船物資として米・酒・硫黄・俵物・樽物・古銅類・筏（材木類）・生魚・前裁物があり、出船物資として米・塩があり、入出船両方は武家の箆筒・長持・鍬鉄・鍋鉄・烙硝・生蠟・武器と鉛があった。査検方法は、基本的に問屋商人などから事前に提出されている証文・印鑑と送状の印鑑を照合し、さらに送状と積荷の数量を照合して確認するという方法がとられていた。また、御規定荷物以外の物資についても、通関の際に送状と積荷の照合が行われた。こうした査検体制を補完したのが、小名木村の茶屋であった。彼らは、本来は中

川番所での査検を待つ船頭や江戸市中の河川運輸業者・諸問屋の世話をする茶屋であったが、そうした営業との関連で、送状に不備があった場合には書替などの世話もした。なお、御規定荷物の場合は、中川番所を通関しない物資は抜荷であるので、中川番所は御規定荷物を扱う問屋商人の独占的集荷権を制度的に保障していたともいえる。なお、野菜・鮮魚についてのみは夜間入船が認められていた。

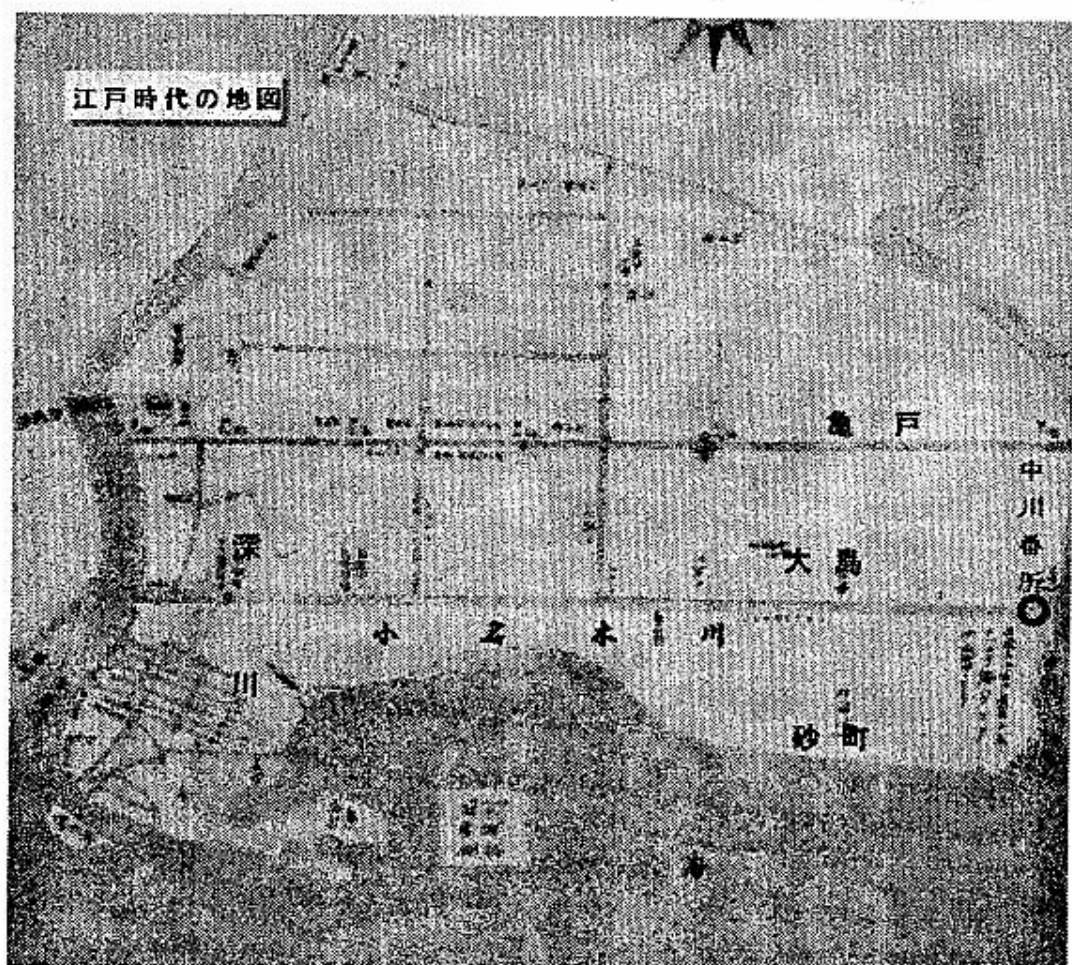
### 中川番所の廃止

文久二年（一八六二）に大名妻子帰国許可が発令され、翌三年に中川番所へ女子の通行方法が指示された。また、同年には武器類の通行制限も大幅に緩和され、中川番所の機能は有名無実化していったが、番所自体は存続し続け、明治新政府に引き継がれ、軍務官の管轄下で水戸藩士が査検を行った。明治二年（一八六九）一月に全国の関所が廃止されたが、中川番所の廃止が正式に指令されたのは四月のことであった。

（加藤 貴）

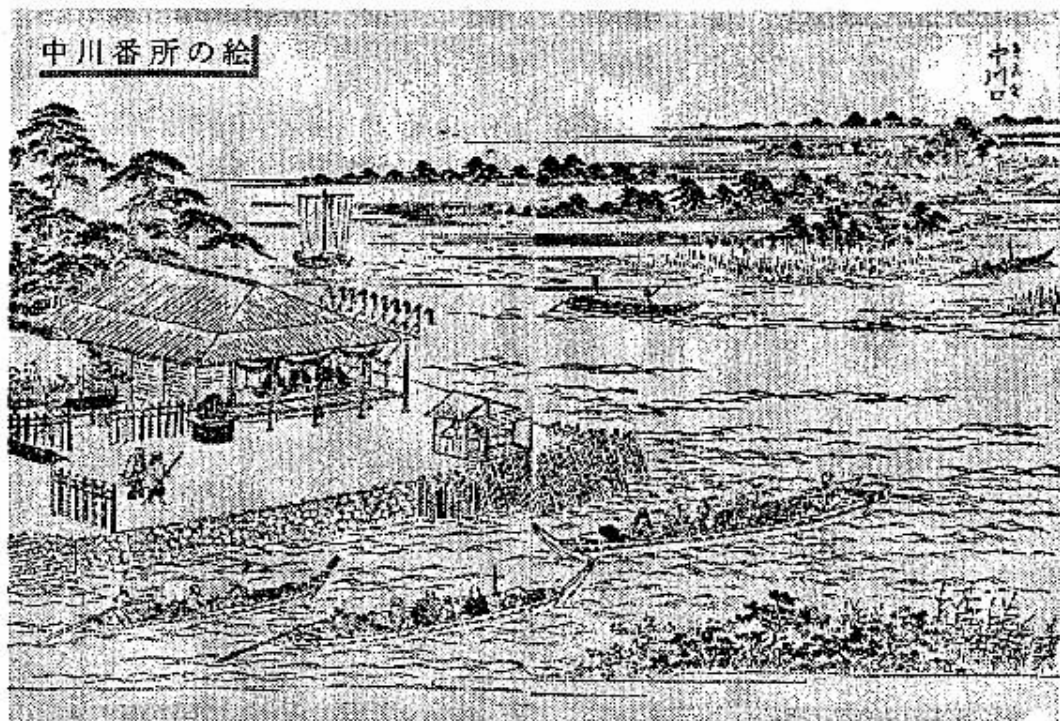
# 小名木川と中川番所

むかしむかし、<sup>とうきょう</sup>東京がまだ江戸<sup>えど</sup>と呼ばれていたころのお話です。  
<sup>とよとみひでよし</sup>豊臣秀吉が天下統一に向けて各地の大名<sup>だいみょう</sup>を従えていく中、<sup>とくがわいえやす</sup>徳川家康  
は江戸に領地を移します。家康は、自分の領地<sup>りょうち</sup>を発展<sup>はつてん</sup>させるために、  
丘<sup>おか</sup>を平らにしたり、海<sup>うみ</sup>を埋め立てるなど、町づくりをはじめます。  
小名木川は、その時につくられた川なのです。家康が、秀吉の死ん  
だ後天下統一をなしとげて、江戸に幕府<sup>ばくふ</sup>をひらくと、町はどんどん  
にぎやかになっていきました。



小名木川は、今の隅田川<sup>すみだがわ</sup>から旧中川<sup>きゅうなかがわ</sup>までほぼ一直線<sup>いっちょくせん</sup>に掘られました。  
この川は江戸がさかえるにしたがって、ますます利用<sup>りよう</sup>されてい  
きます。江戸で使われる食料<sup>しょくりょう</sup>や生活用品<sup>せいかつようひん</sup>などが全国<sup>ぜんこく</sup>から送られて  
きたり、ぎゃくに江戸から全国<sup>ぜんこく</sup>にいろいろなもの<sup>もの</sup>が運ばれていきました。

中川船番所資料館展示解説シートより転載



中川番所は、江戸を出入りするにもつや人を<sup>びんま</sup>検査するために作られたたてものです。江戸のまちが広くなるにしたがって、そのやくわりも大きくなっていきました。

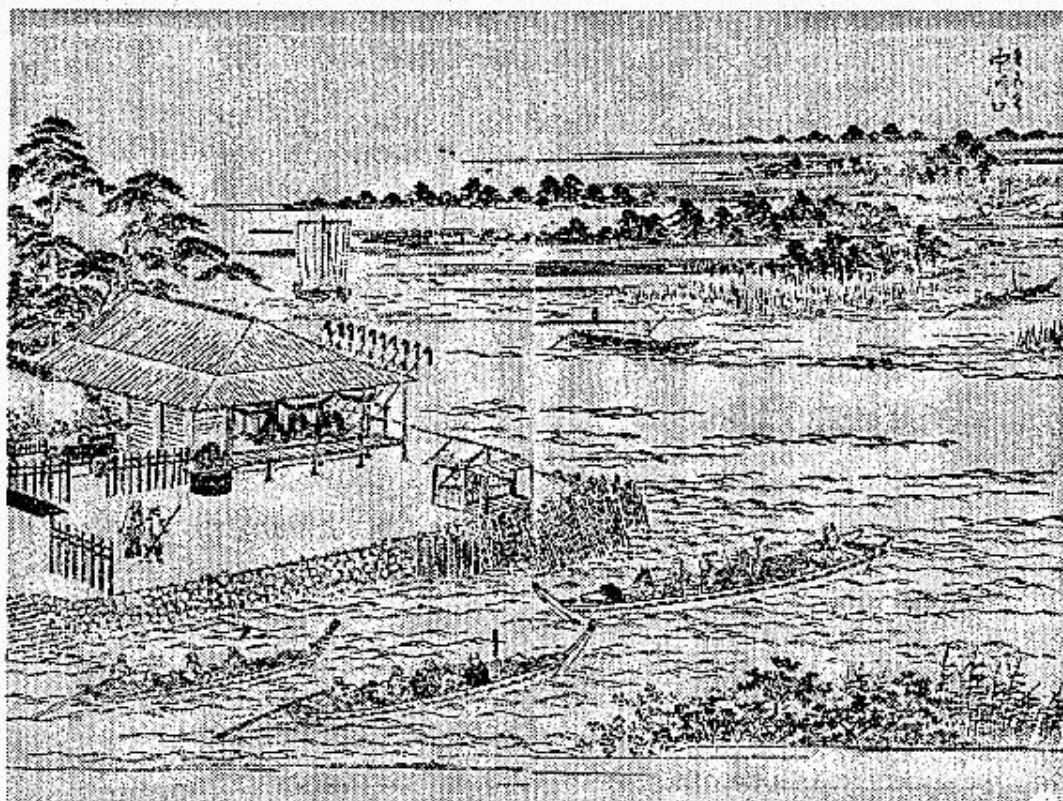
やくわりの一つは、江戸にぶきやてっぽうの玉が入ってこないように見はることです。たくさんのぶきが入ってくることは、幕府に<sup>せんそう</sup>戦争をしかける<sup>かのうせい</sup>可能性があったからです。また、各地の大名から<sup>あず</sup>預かった人質（おとのさまの奥さん）などが逃げないようにとのことで、江戸を出る女の人に対しては<sup>きび</sup>厳しくとりしまりが行われ、通ることを<sup>きん</sup>禁じられました。

ほかのやくわりとしては、江戸に入ってくるお米や塩などといった生活にひつようなものがどれだけ入ってきているのかをチェックしていました。夜、船が通ることは禁止されていましたが、くさりやすい野菜や生のさかななどは特別に通ることを許されています。

このように、江東区内には江戸幕府にとってだいじなたてものがあったのです。これからむかしのことを学ぶことがあるとおもいます。ぜひ、おぼえておいてくださいね。

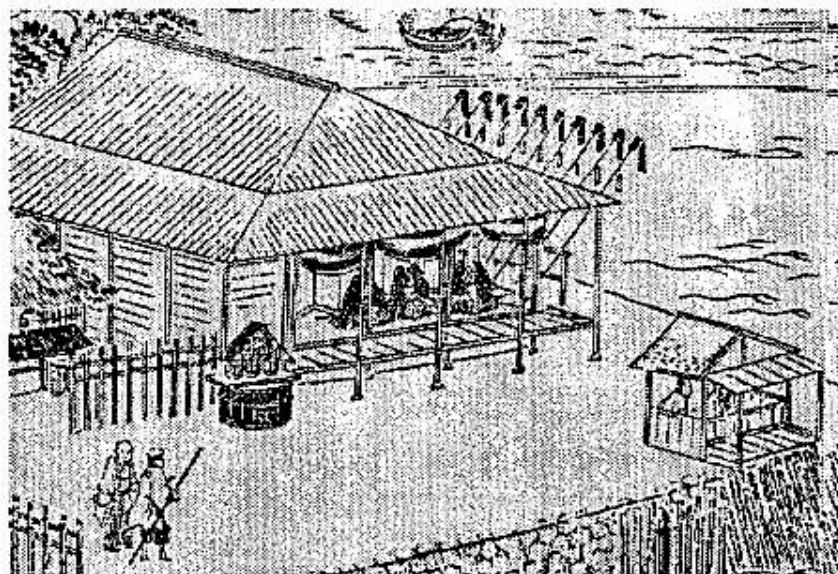
## 『江戸名所図会』にみる中川番所

『江戸名所図会』は、神田<sup>きじちやう</sup>雉子町の名主を勤める斎藤幸雄<sup>ちやうしやう</sup>（長秋）・幸孝<sup>かんさい</sup>（菟齋）・幸成<sup>げっしん</sup>（月岑）の父子3代によって作成されました。刊行されたのは、天保5年（1834）と天保7年で、全7巻20冊から構成されています。内容は江戸の市中を中心として、神社・仏閣<sup>こせきのみしよ</sup>・古蹟名所などを紹介したものです。



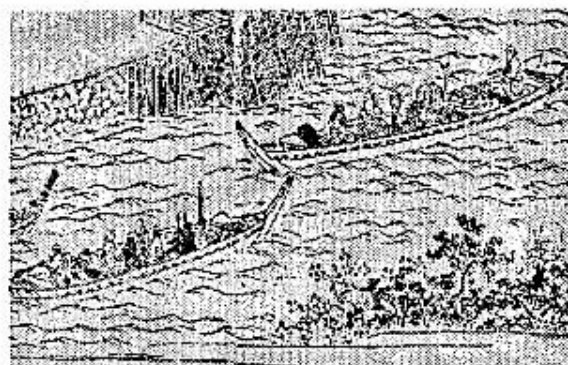
市古夏生・鈴木健一校訂『新訂江戸名所図会』6(ちくま学芸文庫 2000)より作成

中川番所は、第7巻「<sup>ようこう</sup>揺光之部」の「中川口」の絵の中に登場します。絵の左側に描かれている大きな建物が番所で、中に三人の役人が座っています。中川番を勤める旗本は、旗本の中でもかなり高禄であり、将軍が番所を通る時以外はほとんど出勤してこなかったと言われていています。しかし、座っている役人は、羽織を着用しており、川の側や番小屋の中にいる役人たちよりも立場が高いことがうかがえます。



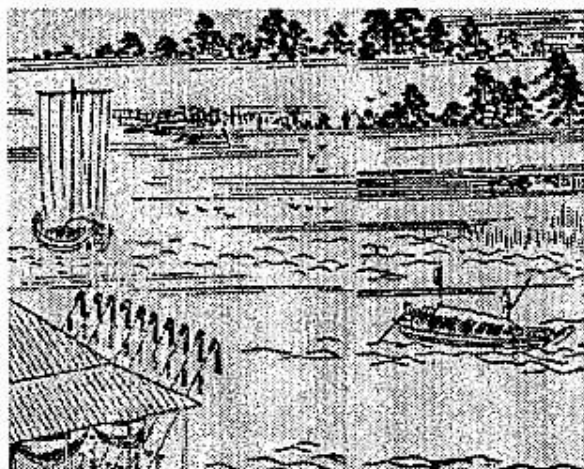
番所の脇に立  
てかけている槍  
は、中川番所が  
江戸の警備のた  
めに設置された  
施設であること  
を象徴していま  
す。槍は中川沿  
いに置かれてお  
り、槍の鞘は大  
型の飾りが付け

られています。これは、番所としての威容を示したのですが、川を通行する人々にとっては格好の目印になったことでしょう。



絵の下部に描かれている川が小名木川で、荷物や人を乗せた船が3艘通過しています。3艘のうち左側の船は、ほかの2艘と比べてやや小さいようです。しかし、どれも猪牙船と呼ばれる小型船と考えられます。

一方、番所の右側に描かれている川は中川です。そこには、荷物のようなものを載せて二人で漕いでいる船と、帆をはった大きな船が見えます。帆をはった船は高瀬船と呼ばれ、川船の中では最大の船でした。航行距離も長く、利根川や江戸川などで活躍しました。



中川船番所資料館展示解説シートより転載

## 中川番所の一日



ここは、江戸の東の玄関口、<sup>なかがわばんしょ</sup>中川番所。むこうから船がやってきます。奥にある川は、右が<sup>ふなぼりがわ</sup>船堀川（<sup>しんかわ</sup>新川）、左が中川。手前の川が<sup>おなまがわ</sup>小名木川です。

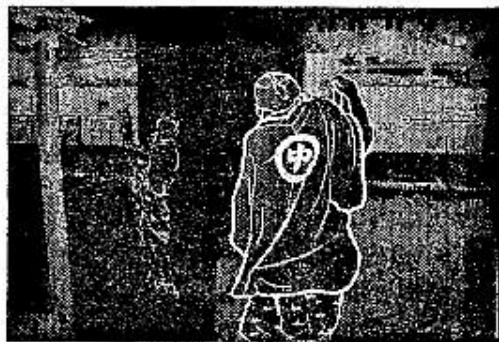


「これこれ、そなたたち。何用であるか」  
番所の役人に呼び止められました。彼は<sup>ばんがしら</sup>番頭と  
いい、番所の中で一番えらい人です。中川番には  
旗本が任命されますが、<sup>おな</sup>將軍御成りのとき以外は  
ほとんどいないので、実際に仕事をしているのは  
その家臣たちです。

これから取り調べが始まるようです。ちょっとのぞいてみましょう。

手形の主は<sup>しもうさのくに</sup>下総国（今の千葉県）<sup>ほんぎょうとくむら</sup>本行徳村の<sup>ぜんざえもん</sup>善左衛門。江戸の  
<sup>こあみちよう</sup>小網町にある河岸まで酒を運ぶところです。こちら側で手形（番所  
を通るための許可証）を改めているのが<sup>こがしら</sup>小頭です。棒を持ち、こわ  
い顔で立っています。

今年は米が不作で、幕府から<sup>さけづく</sup>酒造りの量を3分の1にするようにお達しが出ているので、いつもより取り調べが厳しいようです。

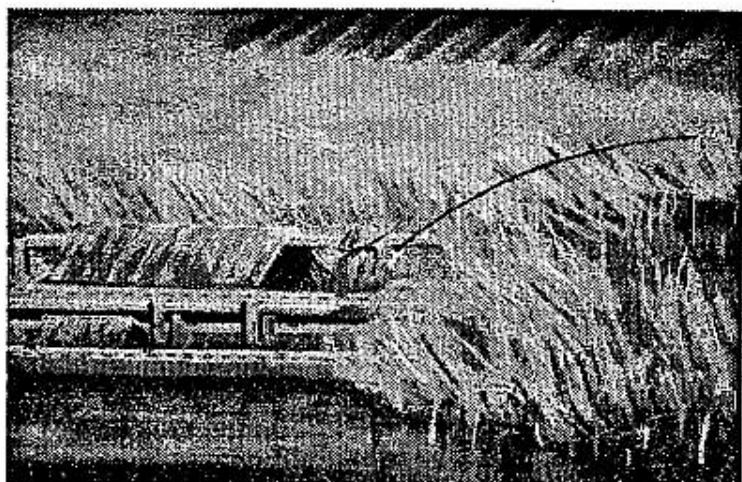
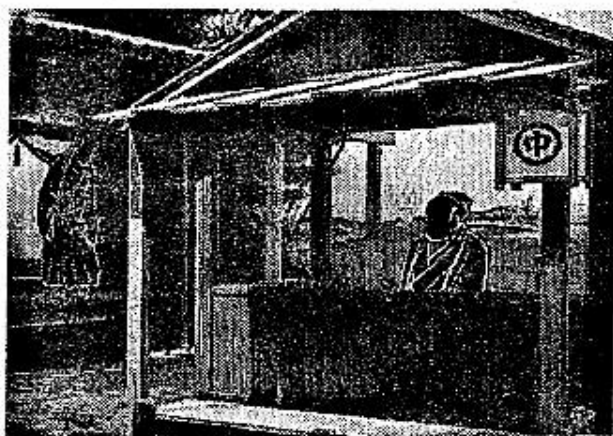




番小屋の中にいるのは添士そいしで、小名木川を出入りする船を見張っているところです。

毎日船ばかり見ているので、退屈たいくつしている様子。

積み荷の酒が気になって、仕事どころではないようですが・・・。後ろの役人がにらんでいます。

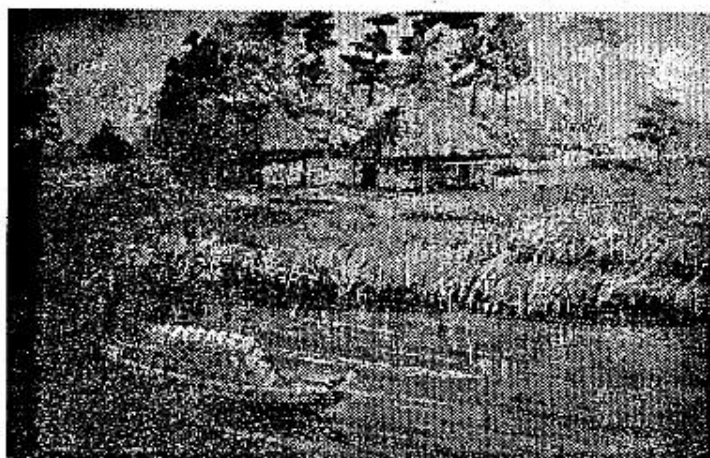


番所の裏では、のんびりと釣りをして  
いる人がいます。

ここ中川口は釣りの名所。特にハゼやキスがよく釣れることで有名なので、江戸からたくさんの釣り人が来ていました。

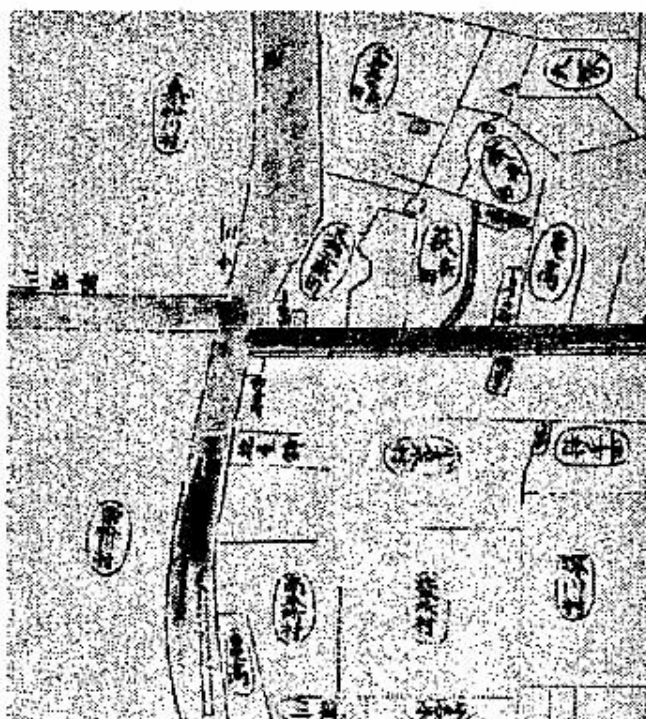
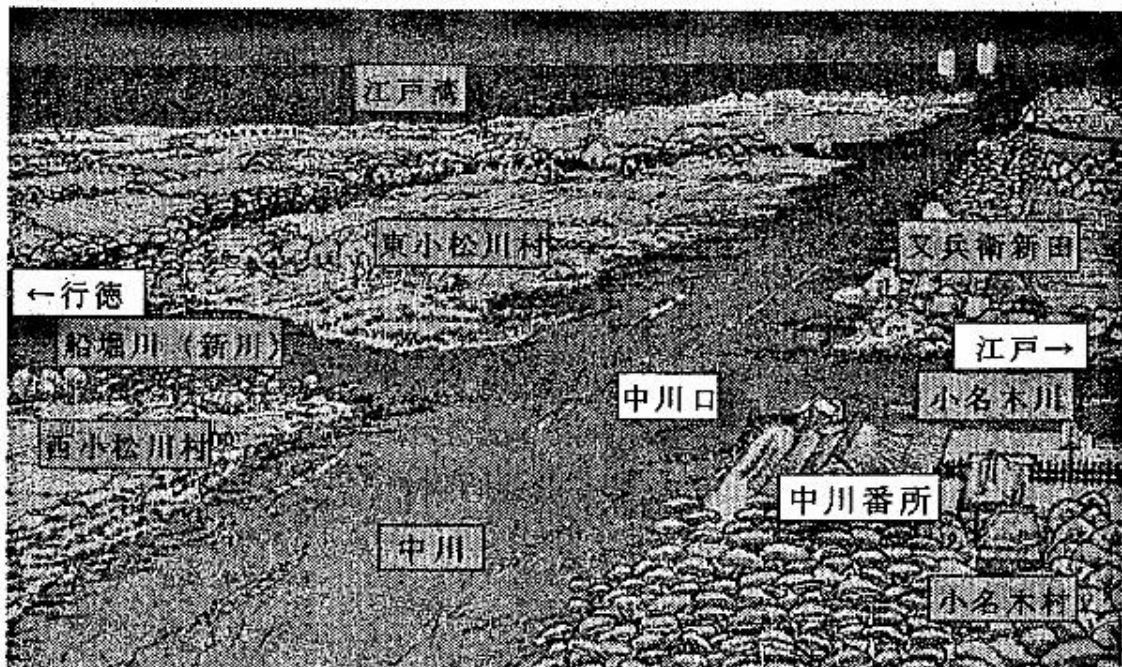
番所の周りには農家や畑があり、ネギやナス、スイカなど、江戸に住む人たちが食べる野菜を作っていました。

ここでとれた野菜や、畑仕事で使う肥料なども、船で運ばれていたのです。



中川船番所資料館展示解説シートより転載

# 現在の中川番所跡



「今所考切図方位」第七之図 (『葛西志』)

上は江戸時代の<sup>なかがわぐち</sup>中川口の想像図、左はこの付近の絵図です。

昔の中川口は江戸湾の<sup>えどわん</sup>河口<sup>かこう</sup>近く<sup>しんかわ</sup>にあり、中川と船堀川(新川)、小名木川が交差して十字路のようになっていました。そのころは江戸川から船堀川を通り、中川口から小名木川へ入るのが一般的で、<sup>ぎょうとく</sup>行徳から江戸まで、小名木川と船堀川をあわせて行徳川とも呼ばれていました。

万延元年(1860)(複製) / 千葉県立  
関宿城博物館蔵

### 中川御関所通行手形

下総国飯倉村(今の千葉県八日市場市)  
から日本橋小網町(今の中央区)の大  
坂屋まで荷物を運ぶ時の中川番所の  
通行手形。これが通行するときの証文  
となります。



差上げ申す一札のこと

一御荷 壹駄也

但し 着類入

右は下総国匝瑳郡飯倉村深田  
三左衛門荷物、江戸小網町三  
丁目大坂屋与惣左衛門方まで  
積送り申し候間、御関所御通  
し遊ばされ下さるべく候、後  
証のため差上げ申す一札、よ  
つてくだんの如し

万延元年申五月十一日

下総国葛飾郡本行徳村

大坂屋平左衛門(印)

中川御関所

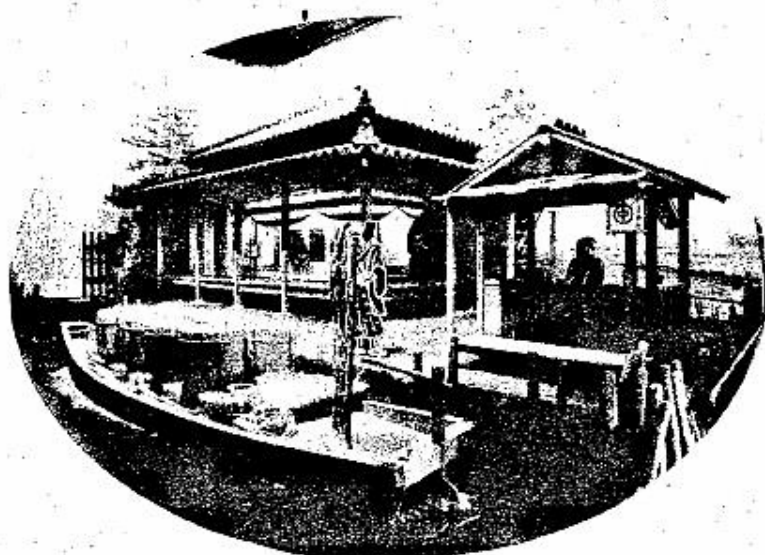
御役人衆中様

## 下は寛文元年(1661)に出された高札で、中川番所の通る時の決まりです。

- 一、夜間は江戸から船を出すことは禁止、江戸に入る船は通行を許可する。
  - 一、中川番所の前を通過する際、乗船している人々は笠や頭巾を脱ぎ、乗り物の戸は開けて中を見せること。
  - 一、女性は身分の上下によらず、たとえ証文があっても通行は一切許可しない。
  - 一、鉄砲は二・三挺までは改めの上で通行を許可するが、それ以上の数がある場合は指図をうけて通ること。その他の武器についても同様である。
  - 一、人が入ることのできる大きさの入れ物は中を確かめて、異常がなければ通す。小さい入れ物に關しては改めには及ばない。万一、不審な点がある船が通る場合は船をとどめる。
- 附 囚人<sup>びと</sup>や怪我人、死人についても、証文がなければ通行は許可しない。

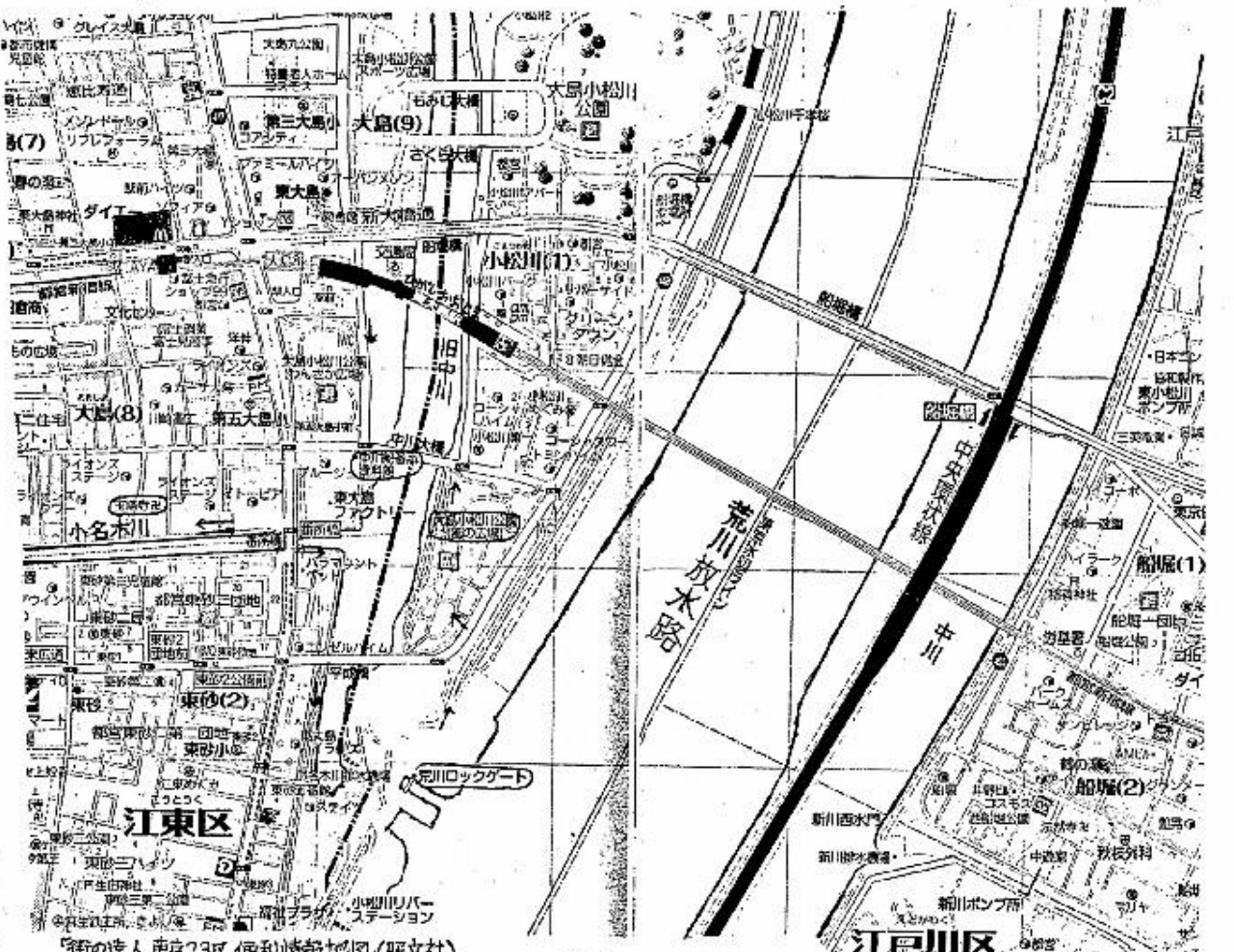
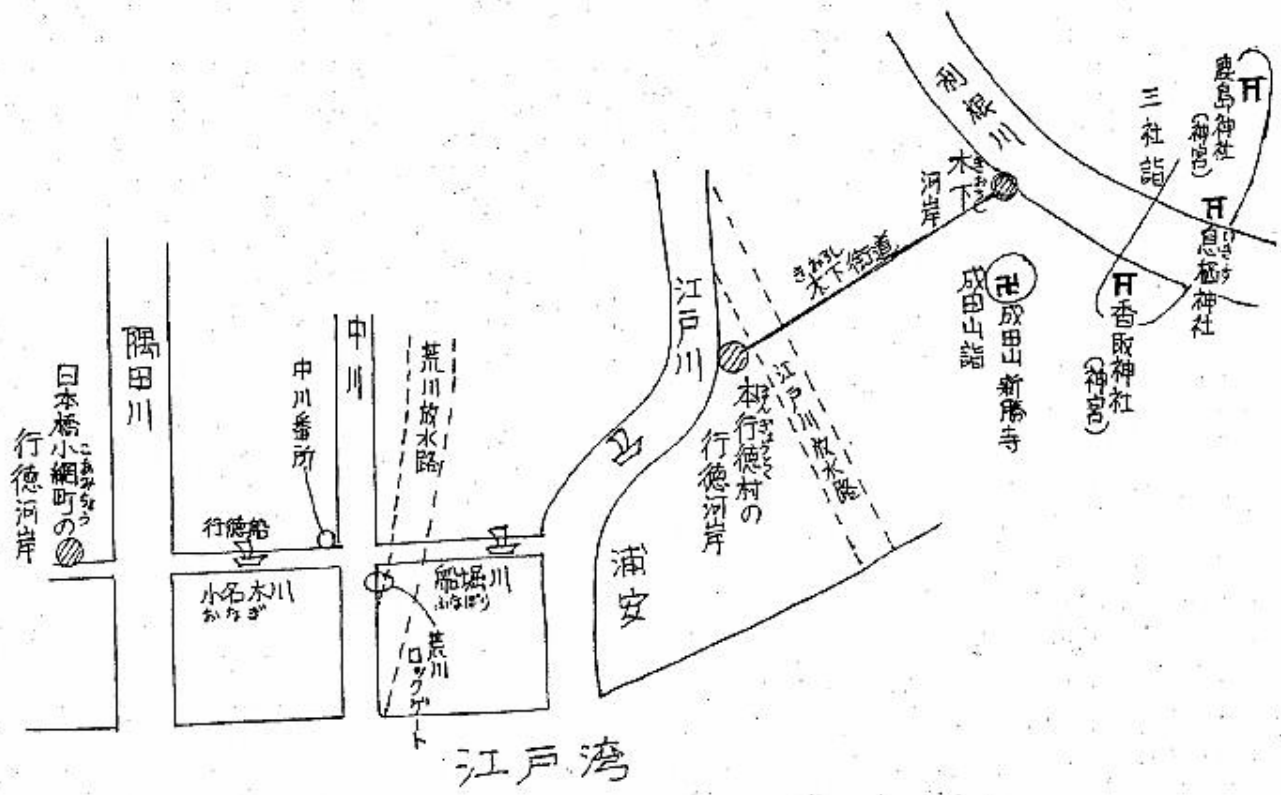
中川番所を通行する手続きでとくに厳重であったものは、鉄砲や鉄砲に使う材料<sup>(硫黄・鉛など)</sup>の輸送でした。これらは武士と武士に準ずる身分の者だけが自分の荷物として運ぶことを許され、さらに武士でも身分によって運ぶ数の制限や手続きが違いました。

また、女性の通行も厳しく取り締まられました。女性は証文があっても通行が許されませんが、結婚や神社仏閣<sup>しんがく</sup>の参詣のための通行は許されました。



資料館の3階に入ると、中川番所の建物が再現されています。この建物は、平成7年の発掘調査の成果と、江戸時代に描かれた絵を参考にしてつくられました。資料館から南に50メートルほど行った場所に、このような建物が実際に置かれていたのです。

中川船番所資料館の「展示解説書」より転載



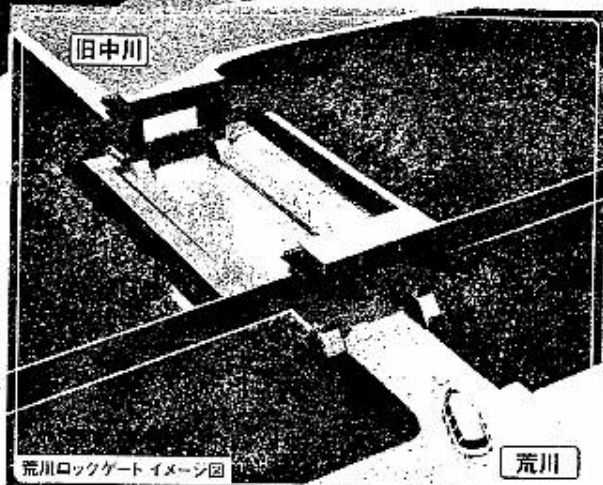
「街の達人東京23区 便利情報地図(昭文社)」

# 災害時に活躍する防災閘門誕生!

ゲート開閉速度10m/minと  
日本最速! 閘門初の耐震設計!

## 荒川ロックゲートとは?

ロックゲート(=閘門)とは、水位の異なる二つの河川を繋ぐための施設で、船が乗る「エレベーター」のような役目を果たす施設です。荒川と旧中川は水位差が最大3.1mにもなりますが、荒川ロックゲートが完成する事により結ばれ、荒川と隅田川にはさまれた「江東デルタ地帯」への水上交通が両方向から確保できるようになります。これにより災害時における救援物資や復旧資材の運搬、被災者の救出など災害復旧活動の支援が可能な、新しい防災ネットワークが誕生します。



※旧中川から荒川へ通行する場合は4→1になります。

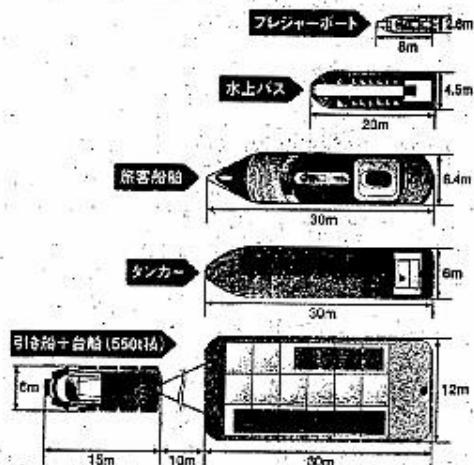
荒川ロックゲートは、前と後のゲートの間が65m、幅は14m。荒川ロックゲートを通ずるには船の前後左右に余裕が必要なため、最大長55m、最大幅12m、最大高4.5m以内の大きさの船であれば通過可能です。また、震災時の支援活動が速やかにできるよう閘門としては初めて阪神・淡路大震災クラスの地震でも閘門・ゲートが耐えられるように設計されており、非常時には速やかな船の通行が可能となっています。そして、閘門内をいち早く船舶が通過出来るようゲートの開閉速度も10m/minと日本最速の設計がなされています。

### ●APとは何ですか?

APとはArakawa Pullの略で、東京湾沿岸島にある量水標の零位を基準とした基本水面のことです。荒川などが水位の基準として採用しています。標高(T.P.)0mのとき、標高(T.P.)+1.134mとなります。

## 荒川ロックゲートを通ずる予想される船

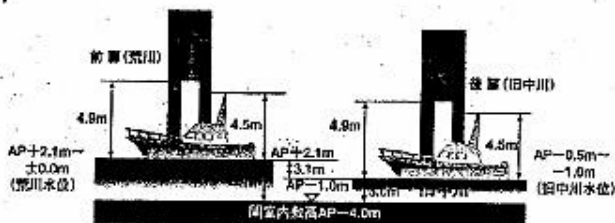
最大長55m、最大幅12m、最大高4.5mの船が通過できます。



※荒川ロックゲートの長さ、幅は「引合船+台船」から決まっています。※船舶の数値は、通行可能となる船舶の一般的な数値です。

## 荒川ロックゲートの高さ

前扉、後扉共4.9m



## 荒川ロックゲートの長さ

